

# 「絵本の読み聞かせの指導についての一考察」

小 滝 正 孝

# 「絵本の読み聞かせの指導についての一考察」

## A Study on Teaching Picture Book Storytelling to Students

小滝正孝

Masataka KOTAKI

### 要 約

保育の場において、ほぼ毎日のように絵本の読み聞かせが行われている。子どもの言葉の発達を考える上で、絵本は欠かせない児童文化財である。そこで本稿では、絵本の読み聞かせをどのように行うか、保育者の養成学校で用いられるテキスト、教育実習での指導教官からの指導・助言を分析し、学生の課題意識を明らかにした上で、学生への指導の在り方の提案を行うこととした。その結果、読み聞かせの目的・方法について、幼稚園教育要領・保育所保育指針や幼小連携を意識した記述があるテキストがあることは確認できた。また、教育実習での指導・助言や学生の課題意識も把握でき、学生への指導の在り方の方向性は示すことができたが、詳細な指導方法は今後の課題である。

キーワード：領域「言葉」、絵本、読み聞かせ、交流型読み聞かせ、保育者養成

### 1 はじめに

#### 1-1 問題の所在

絵本は、子どもに日常生活の追体験や未知の世界、冒険を味わわせてくれる児童文化財である。保育の場において、ほぼ毎日のように絵本の読み聞かせが行われ、子どもたちはその物語の世界に引き込まれ、感動の言葉を発したり、主人公になりきってごっこ遊びに発展したりする。このように、絵本は身近にあり、読むことをとおして語彙を豊かにするとともに想像の世界を広げ、言葉を用いて伝え合う力を養うことに適した教材である。

2017年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針(以下、「教育要領等」という。)においても、絵本を用いた保育の重要性が示されている。

教育要領等の領域「言葉」においては、「絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」ことを「ねらい」として提示されており、「内容」として「絵本や物語など親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」とされている。

また、指導の際の留意事項として、絵本の読み聞かせなどを通して、豊かなイメージをもち言葉に対する感覚を養うこと、注意して聞くことによって話を理解し、言葉による伝え合いが

できるようになることがあげられている。

現在、多くの保育の場では、保育者が絵本を読み、それを静かに子どもたちが聞いていることを基本としていることが多いと思われる。一人一人のイメージを大切にするためにも落ち着いた雰囲気での読み聞かせが行われることは大切である。しかしながら、絵本を読んでもらうだけで、ことばの感覚や内容を理解し、想像を膨らますことができる子どもばかりとは限らない。

集団で読むという環境を活用し、保育者と子どもがともに絵本の世界を楽しみながら、豊かなイメージとことばの感覚を養うための援助・工夫が必要と考える。

#### 1-2 先行研究

保育の中で行われる絵本の読み聞かせについて、保育者の役割の観点から様々な研究がなされている。本研究では、集団で子どもたちが交流等を通して行う読み聞かせについて、以下の研究を参考とした。

小寺、瀧川、玉置(2004)は、保育実践の中での絵本のもつ意味について、教育要領等と保育者養成校で使用されている保育内容「言葉」のテキスト類の調査分析を行った。その中で、保育者の役割として、環境構成員としての絵本の選定、言葉の意味や物語のイメージを広げていく援助を挙げている。

岩崎(1986)は、集団での読み聞かせと1対1の読み聞かせの比較実験を行い、集団での読み聞かせは、他の子どもたちに刺激され、一緒に楽しみ理解しようとする積極性が生まれると主張した。

足立(2013)は、海外で行われている読み手と聞き手または聞き手同士が交流する読み聞かせを「交流型読み聞かせ」と名付け、その内容と方法を紹介し、我が国でも実践の可能であると主張した。後に、足立は、Lawrence Sipeの研究から、「交流型読み聞かせ」における内容、指導の手法、カリキュラム上の位置づけを明らかにし、「交流型読み聞かせ」の可能性を追究している。

欧米と我が国との読み聞かせの目的・方法の違いに関しては、吉田(2018)が『読み聞かせは魔法!』において、詳しく紹介している。吉田は、読み聞かせの目的で日本と異なる部分を紹介し、その目的達成の方法として、読み手と聞き手が双方向の話し合いをしながら読む「対話読み聞かせ」、読み手の頭の中で起こっていることを声に出して紹介する「考え聞かせ」、読み手と書き手が一緒に読む「いっしょ読み」の方法を紹介している。

また、峰本(2018)は、足立や吉田の研究から、学びの責任を教師主導から次第に子ども中心の学びへ移す「責任の移行モデル」について学生や教員に認識させ、様々な読み聞かせの手法を紹介し活用を促す研究を行った。

こうした研究をはじめ、「清聴型読み聞かせ」に限らず、子どもが本を好きになり、言葉に対する感覚を養い、豊かなイメージをもつ読み聞かせの方法が提案されている。

### 1-3 研究の目的・方法

そこで、本研究では、保育者となる学生が、保育者養成校で、「絵本の読み聞かせ」について、その目的や方法等学ぶべきことを明らかにすることとした。なお、研究対象とする読み聞かせは、物語を理解し楽しむことができるようになる3歳児以上の幼児向けとすることとした。

保育者を目指す学生が、絵本の読み聞かせを学ぶ機会として、教育要領等の領域「言葉」について学ぶ授業がある。また、教育実習において、絵本の読み聞かせを実践し、指導教官から指導・助言を受ける場合がある。

そこで、学生が絵本の読み聞かせをどのように学んでいるか実態を把握するため、まず、養成校で使用されているテキストにおいて、絵本の読み聞かせが、いかに記述されているかを調査することとした。このことにより、教育要領等の趣旨が

反映されたテキストにおいて、絵本の読み聞かせの目的と具体的な方法が如何に将来保育者となる学生に提示され、習得していくかを明らかにできると考えた。

次に、保育士・幼稚園教諭養成学校の教育実習終了後の学生に対して、絵本の読み聞かせをどのように実践したか、どのような指導・助言を受けたか、どのような力を身に付けたいかなどアンケート調査を実施することとした。このことにより、各園で行われている絵本の読み聞かせの目的や方法が学生にどう影響するかを把握できると考えた。

## 2 調査の内容と分析

### (1)調査 I —1 調査方法

現行の保育内容「言葉」のテキストでは、絵本の読み聞かせについてどのように記述されているのかを調査し、学生への指導のあり方について分析する。

#### ア 調査対象

保育者養成校において領域「言葉」の指導用に市販されているテキストのうち、2017年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の内容が反映された2018年以降に発行されたものを表1(p.7~12)のとおり選出した。

#### イ 調査内容

8冊のテキストから「絵本の読み聞かせの目的」「読み方・子どもの反応への対応」「読み聞かせの終わり方」「読み聞かせにおける子ども同士の関わり」「読み聞かせにおける保育者からの働きかけ」が如何に記述されているかを調査した。

### (2)調査 I —1 調査結果

#### ア 絵本の読み聞かせの目的

表2は、読み聞かせの目的として書かれている文章からキーワードを抽出し、掲載されているテキスト数をまとめたものである。

表2 読み聞かせの目的 (単位:テキスト数)

1	想像(力)	8
2	言葉・語彙	8
2のうち、言葉に対する感覚・言葉の響き・リズム		3
3	情緒・情操・感受性・豊かな心・感動	6
4	表現力	5

5	思考力	4
6	知識や理解、名称の認識力	2
7	探究心・関心事の広がり・知的好奇心	2
8	社会性、協調性、コミュニケーション力・人間社会への信頼感	2
9	未知の世界	1
10	批判的認識力	1
11	生活態度	1
12	意欲・自主性・行動力	1
13	生きることへの希望	1

すべてのテキストにおいて、読み聞かせの目的として、「想像(力)」、「言葉・語彙」が挙げられていた。これらは、教育要領等の領域「言葉」の内容にある「生活の中でことばの楽しさや美しさに気づく」、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」に基づくものと考えられる。

#### イ 絵本の読み聞かせ方

##### (ア) 読み方・子どもの反応への対応

表3は、読み方及び読み聞かせ中の子どもの反応への対応を、次の2点の視点で書かれているテキスト数をまとめたものである。

表3 読み方・子どもの発言への対応 (単位:テキスト数)

1	適度に感情を込めて読む	5
2	子どもの様子を見ながら読む 中断はしない 子どもの言葉を取り入れない	4

5社のテキストにおいて、表3の記述があった。大げさな読み方は、イメージを限定したり、絵本の内容より保育者に注意が向けられたりするという記述があった。また、子どもの発言を取り上げず、中断しないのは、物語の世界を楽しむためとの記述があった。適度に感情を入れて読むことも、子どもの言葉を取り上げず中断しないことも、子どもが物語の世界に浸ってイメージを膨らませていることを大切にすることを配慮であると考えられる。

##### (イ) 読み聞かせの終わり方

表4は、読み聞かせの終わり方で留意すべき点が書かれた文章からキーワードを抽出し、掲載されているテキスト

数をまとめたものである。

表4 終わり方のキーワード (単位:テキスト数)

1	余韻・感動・イメージ等	5
2	共感・言葉受け止める等	3
3	質問しない・感想を求めない等	6
4	話し合いを避ける等	1

7社のテキストにおいて、表4の記述があった。保育者が解説をしたり質問や話し合いしたりするのを避けるのは、楽しんでいた絵本の世界を壊したり興味関心をそいだりしないためとされていた。子どもの感想があったときなどは、共感して受け止めること、子供の気持ちに寄り添う態度が大切であるとあった。終わり方においても、子どもが余韻を味わい、豊かに広げているイメージの世界を大切にすることという基本として書かれていた。

#### ウ 読み聞かせにおける子ども同士の関わり

3社のテキストにおいて、読み聞かせの後、子ども同士の関わりに焦点を当てた記述があった。感動や関連する体験を話し出す、ごっこ遊びに発展する、周りの子どもの反応に影響を受け絵本のおもしろさに気づく、友だちの考えに共感し、ストーリーの理解を深めていく、子どもが読み聞かせを始める、といった例が紹介されていた。

#### エ 読み聞かせにおける保育者の働きかけ

5社のテキストにおいて、読み聞かせの途中、読み聞かせ後、保育者からの働きかけについて記述があった。以下は、文意を損なわないよう筆者がまとめたものである。

- ・小学校で必要な力(例:登場人物の気持ちを聞いたりする時間)を「ちよい足し」する。文脈を補う言葉を身につけられる。1対多のコミュニケーションの練習にもなる。
- ・子どもの言葉を取り入れ、やり取りを楽しませる。
- ・表紙の絵から話の内容を想像させ、お話づくりを楽しむ。
- ・自分の意見を言ったり友だちの意見も聞く。
- ・「一読総合法」を取り入れてみる。
- ・文字のないページでの言葉がけを検討する。
- ・話し方や聞き方のルールが言葉がけをする。
- ・保育者の想いを伝える。

- ・最後が書かれていない絵本の最後を問いかけて想像性をみる。
- ・絵本の途中で問いかけをして楽しむ。

## 調査Ⅱ—1 調査方法

保育者を目指す学生が、教育実習において如何に取り組んでいるかを調査し、学生への指導のあり方について考察する。

### (1) 調査対象者

関西地方 A 短期大学1年生71名を対象とし、66名から回答を得た。アンケートの回収率は、93.0%であった。

### (2) 調査日・場所

2021年11月30日。教育実習直後の授業中、Google Forms を用いオンライン上で回答を得た。

### (3) 質問内容

学生が、集団での絵本の読み聞かせに関する指導を習得する上で考慮すべきと考える点を質問した。質問内容は、「問1 絵本を1か月に読む冊数」、「問2 絵本の入手場所」、「問3 教育実習での絵本の読み聞かせ実践の有無」、「問4 (1) 読み聞かせの対象年齢」、「問4(2) 1回に読んだ絵本の冊数」、「問4(3) 選書方法」、「問4(4) 絵本の読み方」、「問4(5) 子どもの発言への対応」、「問4(6) 問4(5)の具体」、「問4(7) 読み聞かせ中の保育者からの質問」、「問4(8) 問4(7)でのやりとりの具体」、「問4(9) 実習園の教員からの指導・助言」、「問5 実習園での絵本の読み聞かせの頻度」、「問6 読み聞かせについて学びたいこと」、「問7 読み聞かせで大切にしたいこと」とした。

### (4) 倫理的配慮

調査実施にあたって調査対象者には、無記名であること、教育実習評価の対象ではないこと、回答は随意であること、被験者から得られたデータは調査の目的以外に利用しないことを事前に伝えた後に回答を得た。

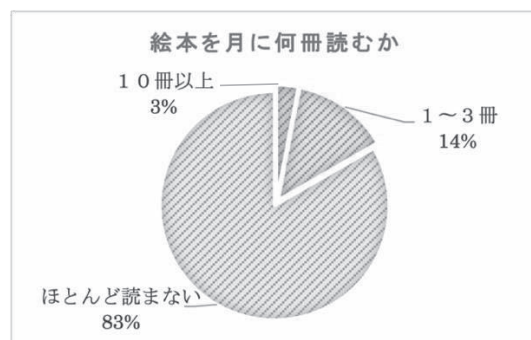
## 調査Ⅱ—2 調査結果

本研究では、A 短期大学1年生71名に対し、幼稚園での教育実習における絵本の読み聞かせの実態を調査した。その結果を以下に示す。

### (1) 絵本の読書量(1か月あたり)

- ・「1～4冊(週に1冊程度)」
- ・「5～9冊(週に2冊程度)」
- ・「10冊以上(週に3冊以上)」
- ・「ほとんど読まない」から選択

表5 月に何冊絵本を読むか

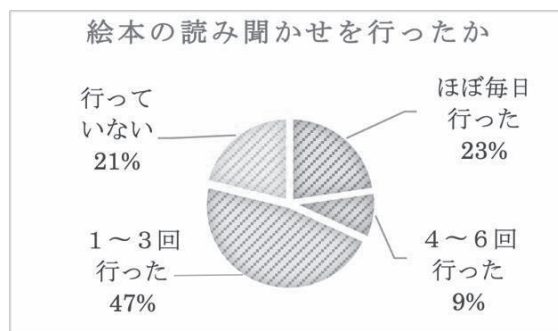


### (2) 教育実習での絵本の読み聞かせ

- ・「ほぼ毎日行った」
- ・「1～3回行った」
- ・「4～6回行った」
- ・「行っていない」
- ・「その他(記述)」から選択

表6 実習での読み聞かせ (単位:人、%)

頻度	人数	割合
1 ほぼ毎日行った	15	22.7
2 4～6回行った	6	9.1
3 1～3回行った	31	47.0
4 行っていない	14	21.2
計	66	100



### (3) 選書理由

- ・実習で読み聞かせを行ったと答えた者にのみ回答を求めた。対象は52名。
- ・「自分の好きな絵本を選んだ」
- ・「季節のあった絵本を選んだ」
- ・「園の行事等にあった絵本を選んだ」
- ・「子どもたちの様子を見て伝えたい内容のあるテーマの絵本を選んだ」
- ・「その他(記述)」から選択

表7 絵本を選んだ理由 (単位:人)

1 自分の好きな絵本を選んだ	15
----------------	----

2	季節のあった絵本を選んだ	15
3	園の行事等にあった絵本を選んだ	3
4	子どもたちの様子を見て伝えたい内容のあるテーマの絵本を選んだ	7
5	その他	13

「その他」は、年齢にあった本、園から薦められた本がそれぞれ5人ずつであった。絵本の読書量と選書との関係は見られなかった。

#### (4) 絵本の読み方

・実習で読み聞かせを行ったと答えた者にのみ回答を求めた。対象は52名。

・「感情を込めて読んだ」・「感情をあまり込めずに読んだ」・「絵本の内容により感情を込めたり込めなかったりと読み分けた」・「その他(記述)」から選択

表8 絵本の読み方 (単位:人)

1	感情を込めて読んだ	38
2	感情はあまり込めずに読んだ	3
3	絵本の内容により感情を込めたり込めなかったりと読み分けた	11

#### (5) 読み聞かせ中の子どもの発言への対応

・実習で読み聞かせを行ったと答えた者にのみ回答を求めた。対象は52名。

・「読むのを中断して発言に対応した」・「発言に対応せず読み続けた」・「発言はなかった」・「その他(記述)」から選択

表9 読み聞かせ中の子どもの発言への対応 (単位:人)

1	読むのを中断して発言に対応した	26
2	発言に対応せず読み続けた	9
3	発言はなかった	10
4	その他	7
計		52

「その他」は、表情等で応えたとの回答が3人であった。

#### (6) 子どもの発言への対応内容

・「読むのを中断して発言に対応した」と答えた者にのみ自由記述で回答を求めた。対象は26名。

・回答から文意を損ねないよう筆者が以下のとおり対応内容を分類しまとめた。

表10 発言への対応内容 (単位:人)

1	共感する言葉を返した(「そうだね」など)	17
2	次の展開を期待させる言葉を返した(「どうなるかな」など)	8
3	質問に答えた(内容に関すること)	2
計		27

#### (7) 読み聞かせ途中での子どもへの質問・話しかけ

・実習で読み聞かせを行ったと答えた者にのみ回答を求めた。対象は52名。

・「質問したり話しかけたりした」・「質問しなかった」・「その他(記述)」から選択

表11 読み聞かせ途中の質問・話しかけ (単位:人)

1	質問したり話しかけたりした	14
2	話しかけなかった	37
3	その他	1
計		52

#### (8) 子どもへの質問・話しかけ内容と子どもとのやりとり

・「質問したり話しかけたりした」と答えた者にのみ自由記述で回答を求めた。対象は14名。

・回答から筆者が以下のとおり対応内容を分類しまとめた。

表12 どのようなやりとりだったか (単位:人)

1	情報の取り出しの質問と返答	6
2	次の展開の予想と返答	4
3	絵本への興味づけと返答	3
4	生活への動機づけと返答	2
計		15

#### (9) 実習園の指導者からの指導・助言

・実習で読み聞かせを行ったと答えた者にのみ自由記述で回答を求めた。対象は52名。

・回答から筆者が以下のとおり対応内容を分類しまとめた。

・実習生が読み聞かせに関して学びたいことと関連させてまとめた。

表 13 実習園の先生からの指導・助言（単位：人）

1 読み方(抑揚、大きさ、速さなど)	16
2 基本事項(立ち位置、持ち方など)	12
3 子どもへの関わり(導入・対応・終わり方など)	9
4 選書	2
5 その他	6
6 無答	11

3「子どもへの関わり」の詳細については、導入について、「導入や話しかけで注目させる」という指導助言が1人あった。読み聞かせ中については、「子どもを見ながら」など子どもの様子を把握する指導助言が3人あった。子どもの発言については、「受け止めるだけ」など深入りしないようにという指導助言が2人あった。終わり方について、「ふり返りをする」「締めくくりの言葉を入れる」との指導助言が2人、「ふり返りを入れない」との指導助言が1人であった。

#### (10) 絵本の読み聞かせに関して学びたいこと

- ・全員対象に自由記述で回答を求めた。30人から回答があり、筆者が以下のとおり内容を分類しまとめた。
- ・実習園で指導・助言を受けたことと関連させてまとめた。

表 14 絵本の読み聞かせで学びたいこと（単位：人）

1 読み方(抑揚、大きさ、速さ)	10
2 基本事項(立ち位置、持ち方など)	5
3 子どもへの関わり(導入・対応・終わり方など)	13
4 選書	4
5 その他	3
6 無答	34

3「子どもへの関わり」の詳細については、「絵本の世界に引き込めるような導入」など導入と回答したものが6人、子どもの発言への対応や問いかけは3人、締めくくり方が4人であった。

#### (11) 絵本の読み聞かせで大切にしたいこと

- ・全員対象に自由記述で回答を求めた。66人から回答があ

り、筆者が以下のとおり内容を分類しまとめた。

表 15 絵本の読み聞かせで大切にしたいこと（単位：人）

1 読み方(抑揚、大きさ、速さ)	38
2 基本事項(立ち位置、持ち方など)	13
3 子どもへの関わり(導入・対応・終わり方など)	19
4 選書	5
5 その他	11
6 無答	0

3「子どもへの関わり」の詳細については、子どもの様子を確認しながらと回答したものが11人、問いかけなど工夫しながらと回答したものが3人、導入で絵本の世界に等との回答が2人、締めくくりのお話等との回答が2人であった。

また、読み方など技術的な面と合わせて、子どもが楽しんで集中できる読み聞かせにしたいと回答したものが10人、絵本の世界に入り込める読み聞かせにしたいと回答したものが4人であった。

表1-1 絵本の読み聞かせに関する記述(下線 i :読み聞かせの目的、下線 ii :読み方、下線 iii :終わり方、下線 iv :子ども同士の関わり、下線 v :保育者からの働きかけ)

<p>新版 保育内容・言葉 2018 福沢周亮監 教育出版</p>	<p>保育内容 言葉 2018 秋田喜代美／野口隆子編著 光生館</p>	<p>新版 言葉 2018 谷田貝公昭監 一藝社</p>	<p>保育内容 言葉 2018 太田光洋編著 同文書院</p>
<p>では具体的に絵本は子どもの発達にどのような影響を与えるのだろうか。i 1 点目は、ことばの発達が促進される点である。例えば絵本のなかで今まで聞いたことのないことばがあった場合、読み聞かせをしていくと、大人に質問したり、自らお話の前後の文脈からそのことばを推測し、想像力を働かせ、新しいことばを覚えていく。また、絵本のなかの文章は豊かなことばの表現力のお手本となる。i 2 点目は、想像力・思考力を豊かにする点である。子どもは自分で好きなように想像して、これまで経験したことのない世界や感情を体験したり、見たことのないものを見ながら考えたりするのである。i 3 点目は、子どもの情緒の安定に役立つ点である。読み手は絵本を読むとき、子どもをひざにのせたり、向かい合ったり、隣に並んだり、いずれの場合も身体的距離が密接となる。子どもは大好きな本を保育者が楽しく、ときには一人一人の目を真ながら読む。入眠前に読み、トントンと背中をたたきながら子どもが寝つく。読み聞かせの方法はさまざまであるが、いずれの場合も子どもは「特別な時間」や「自分だけの時間」を体験する。絵本を媒介として子どもと絵本を読み聞かせる者との情緒的なつながりが強固となっていくのである。また、子どもの絵本の楽しみ方は「読み聞かせ」が基本である。読み聞かせでは、お話はおとなが読むため、子どもは文章</p>	<p>幼児期になると、保育者や友達と一緒に読むなかで興味をもちじっくりと見と聞き入りながら絵本に親しみ、自分(たち)の経験と結びつけ、想像する楽しさを味わうようになり、豊かなイメージを広げていくようになる。i 絵本の言葉の響きやリズムを楽しみながら、新しい言葉や表現に触れ、し言葉や書き言葉(文字)子どもなりの話に対する興味や関心を大切に、言葉に対する感覚を養えるよう配慮することが必要である(第2 節参照)。(p.97)</p> <p>事例6「からすのパンやさん」(3歳児) 絵本のなかで、子どもたちが何度も繰返し楽しむ場面がある。からすのパンやさんが、とつてもすてきな、変わった形の、楽しいおいしいパンをどさどさ作ってくださった場面である。「ほく、くじらパンにする」「私は、あひるパン」と、思い思いに好きなパンを手にとつたつもり、食べたつもりで、絵本を繰り返し楽しんでいた。そんなふうにならなうちに、「いずみちゃんがからすのパンやさんについてみたいねえ」「チヨコちゃんやリンゴちゃんに会ってみたいねえ」と会話が盛り上がりつつあった。はじめは、からすのパンやさんは会ってみたい対象だったが、そのうち、「ほく、チヨコちゃんだよ。かーかーかー」「私は、レモンちゃん! かーかーかー」と、からすになりきって、園庭や散歩先で遊ぶ姿がみられるようになった。(注: 下線は筆者が削除)</p>	<p>i 絵本は、子どもの想像力や言葉や育むための保育教材として、どの保育室にも用意されている。(pp.80-81)</p> <p>i 保護者や教師、友達とともにお話を共有する経験は、生きることへの希望や人間社会への信頼感を得ることにつながる。(略)また絵本は、個人の経験や興味・関心の枠を超えて、未知の世界に導いてくれる。その経験が生きていく幅を広げ、豊かな心を育む。(p.116)</p> <p>幼稚園教育要領第2 章「言葉」の3 つのねらいのうち、「(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」や「内容」の「(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」の項目に絵本や物語は関わっている。</p> <p>i 保護者や教師、友達とともにお話を共有する経験は、生きることへの希望や人間社会への信頼感を得ることにつながる。また絵本は、個人の経験や興味・関心の枠を超えて、未知の世界に導いてくれる。その経験が生きていく幅を広げ、豊かな心を育む。(p.116)</p> <p>では、幼稚園・保育所側はどのような工夫ができるだろうか。筆者は、これまで幼児教育で用いられてきた活動や方法を大</p>	<p>絵本は絵と文が融合しあってひとつの世界を創っていく。i 幼児期における絵本はそれを与えるおとなの願いや子どもに手渡したいものが詰まった文化であり、ことばのおもしろさ、そして、美しい母国語を伝え、子どものことばと心を育むために欠かせない。幼いころの絵本との出会いには、絵本と関わってくれたおとなの心の触れあいを通し、ことばの世界を楽しみ、想像力をふくらませていくことにつながる。そして、やがて絵本を媒介に、子どもの情操(喜び、悲しみ、戸惑い、怒り、やさしさ、忍耐、思いやりなど)、意欲、生活態度、自主性、行動力、探究心、そして子どもにとって大切な考える力、生きる力が育まれていく。</p> <p>i 2 絵本の特徴</p> <p>①絵を通して体験ができる。日常生活のなかで経験していることを、絵本を通して再認識する。②感動する心を育て、情緒を安定させていく。主人公と同一化する。③想像力を豊かにしていく。未経験の世界を見出し、イメージを豊かにしていく。④語彙を豊かにしていく。経験を再確認し、未知のことばに触れ、語彙を豊かにする。⑤美しく正しい日本語に触れ、言語感覚を養っていく。日本語のしくみにそった正しいことばや美しいことば使いに触れ、語や文章のしくみにも気づいていく。⑥文</p>



を耳で聞きながらゆっくりと絵を楽しむことができる。もちろん文字が読めるようになれば自分で読むこともある。しかし、文字を読めるようになったばかりの子どもでは読み方がただしく、文字ばかりを追ってしまうので内容をかみ砕くことがむずかしい。また、せつなかの楽しい時間を自分で読めるでよ。」「本を読みなさい。」と強制されてしまえば、もはや楽しい時間ではなく、「お勉強の時間」である。絵本は読み聞かせが基本なのである。子どもが読みたいと思う本を、何度も楽しい雰囲気なかで読んであげてほしい。さらに、読み聞かせの要点として福沢(1991)は、読み手も楽しめる絵本を用意する、ii 一本調子にならないようにする、iii 読み聞かせの後に内容についての質問をくどくどしない、などをあげている。読み手が楽しいと感じられる本を読むときには、よい雰囲気でも読み聞かせができるであろうし、一本調子になったりすることも少ないだろう。ii あまり大げさな抑揚はイメージを限定させるので不要であるが、その絵本のもつ雰囲気に合わせてリズムで読み聞かせを楽しんでほしい。また、iii 読み聞かせの後は、「内容についての質問をしない」というのは、楽しい読み聞かせの後には必ず「質問タイム」、つまり「テストの時間」が待っていると読むと読み聞かせを楽しむことができなくなってしまうし、読み聞かせを楽しんでも毎回質問タイムでよい成績が取れない場合には、絵本そのものをまらなく感じてしまうからである。自由な楽しい雰囲気なかで、読み聞かせそのものを楽しむことが重要なのである。

(pp. 137-139)

5) 指導事例「絵本の読み聞かせ」  
予想される幼児の姿  
・トルとヤギのやり取りの場面では、ド

事例6では、iv 子どもたちはまず「変わった形のパン」という言葉について、自分のイメージを伝え合い、楽しんでいて、その後に絵本のなかに出てくるパンというものの川に限らず、絵本の主人公たちに対する興味も湧いてきて、話題が広がった。さらに、ごっこ遊びなどで自分が主人公になり、自分役割やセリフなどを楽しんでいた。また、遊びが展開するたびに、子どもたちが異なる言葉を交わし、絵本から自分たちのイメージを共有しながら伝え合う喜びを感じていた。

2 読み聞かせに止まらないこと  
絵本は、子どもたちの想像を膨らませるための手助けになる。iv 絵本から、関連している遊びへと発展したり、絵本の内容が子どもたちの新しい話題になって話が盛り上がりたりすることがよくみられる。このように、絵本の読み聞かせ活動を組み聞かせただけで終わりにするだけではなく、ときにはより長い時期で楽しめる、多様な活動に発展できるように計画を立てると、子どもたちの言語体験はより豊かになる。また、児童文化財を取り入れる活動計画は、言葉の領域に限らず、多領域にわたって総合的に考慮する必要がある。

(pp. 51-52)

事例3 絵本で遊びながら(3歳児)  
A児のお気に入りの絵本は『ふしぎなナイフ』。ページをめくるたびに、「ふしぎなナイフが…」という言葉と一緒にナイフが、曲がったり、折れたり、ほじけたり、膨らんだりする絵本である。実際には起こらないことが絵のなかで起こることがおもしろいようで、クラスでも人気の絵本となった。何度も読んでいくうちに今度は、A児が読み手となって、友だちに聞かせるようになった。

自分の思いを自分なりの言葉で表現す

切にしたうえで、v 小学校で必要な力を「ちょい足し」することを提案したい。例えば、絵本を読み聞かせた後に、子どもたちに感想を聞いたり、登場人物の気持ちにどうだろうか。このようにすることで、以下のような効果が望める。まず、詳しく聞くことで、文脈を補う言葉を身につけることができる。子どもが感想を語るときに「それは、どの場面？」と問い返せば、「○○でねずみさんが、○○した場面」と文脈を補い、詳しく話す練習になるだろう。また、1 対多のコミュニケーションの練習にもなる。感想を語る際、初めは保育者1人に向けて語るだろう。しかし、他のクラスの間にも聞かせてほしいと伝えることで、習慣がつけば、語るほうは「多」の一人として話す言葉を、聞くほうは「多」の一人として聞くことを練習できる。「○○ちゃんの見えたと似ているね。△△君はどう？」などと、子どもどうしの感想をつなぐように働きかけると、友達の感想を聞いてみたいという気持ちを育てることもつながるだろう。

(pp. 38-39)

持ちやすい手の親指と他4本の指の間に本を置き、しっかりと支える。絵本の上部が後ろに倒れたり、頭が絵の前にかぶさったりする例が多いが、本上部はむしろ前に倒れるくらいが子ども視線を捉えやすい。本に目を近づけなくても読めるように見えるほど練習するとよい。(4) 終わり方 裏表紙を見せ終わるのが原則だが、例えば『もりのなか』[エッツ、1963]のように表裏両面の絵がつながっている場合は、広げて両側を見せる。iii 感想は強要せず、子どもが自発的に感想を口にしたら、よく聞くように心がけよう。(p. 119)

字の働さに気づき、文字に関心をもつ。タイトルや文中の読み聞かせから文字の働さに気づいていく。⑦ 知的な好奇心を満たし、考える力を育てていく。主体的に関わることをよって、「なぜ、どうして」を自ら学ぼうとしていく。⑧ 間接経験によって、知識や理解を広げ、深めていく。直接経験できないことやしたことのないことを間接的に経験し、興味をもち、自分もやってみようという意欲や好奇心を育てる。

(pp. 101-102)

3 歳児と絵本  
3 歳児になると、短く簡単な絵本から本格的なストーリーを楽しむ絵本へと変化していく。『はじめてのおつかい』(福音館書店)や『はじめてのおおすばん』(岩崎書店)、『こずめめのおつかい』(福音館書店)などは、おとなへの依存から自立に向かい、自分の力を試してみたい3歳児の心をとらえた絵本といえる。子どもは主人公と一体化し、不安や戸惑い、喜びなどさまざまな感情を追体験していく。また、最近では長時間保育の子どもも多く、お迎えのころ外は真っ暗になるが、iv 絵本「らやみえんのたんけん」(福音館書店)は、そんな子どもたちの経験と重なって共感が始まる。子どもはごっこ遊びを体験して再び同じ絵本に出会うと、絵本の楽しさをさらに増していくものである。また、絵本に関心のなかつた子が、集団読みのなかで周りの友だちの反応に影響を受けて、絵本のおもしろさに気づいていく姿も、保育のなかではよく見られる。

「読み聞かせから劇遊びへ」  
子どもは少しくわてドキドキする「おぼけ」や、「おおかみ」が登場する絵本は大好きである。この『おおかみと七ひきのこやぎ』も子どもたちにとって人気の1冊

- ・ キドキキした表情を見せる。
- ・ 環境の構成と保育者の援助
- ・ 大きな声ではっきりとゆったりと読む。
- ・ ii 読みながら、幼児の様子をよく見て必要に応じて読み方やページをめくるタイミングを配慮する。
- ・ ii 途中で集中が切れる幼児がいたときは、話を中断せず、読み方の抑揚を変え、などをして、興味が持てるようにする。
- ・ iii 話の最後はことばのリズムを感じさせ、さらりとおしまいにする。
- ・ 予想される幼児の姿
- ・ 読み終わった後、「トルコこわかったね。」「大きいヤギ強いね。」など自分なりの思いをことばにする。
- ・ 環境の構成と保育者の援助
- ・ iii 読み終わった後、子どもたちからのことばがあれば、受け止める。
- ・ 予想される幼児の姿
- ・ 「もう1回読んで」と言う。
- ・ 環境の構成と保育者の援助
- ・ iii 楽しかった思いに共感する。「絵本は本棚に置いておくね。また見てね。」と自由に良いことを伝える。(pp.171-172)
- (注：指導事例の表から、読み方に関係する「予想される幼児の姿」とそれに対応している「環境の構成と保育者の援助」を筆者が抜粋したものである。)

ることが楽しいのが3歳児である。しかし、自分なりの言葉が周りになかなかなわらずに葛藤する時期でもある。そんなときに、絵本の絵と言葉が直接的に対応していてわかりやすく、ページをめくると自分に気持ちや裏切らない『ふしぎなナイフ』は、A児にとって安心で楽しいものであったのだろう。iv 何度も読みながら展開を覚えたA児は、次に自分の前にぬいぐるみを座らせて、ぬいぐるみに向かって『ふしぎなナイフ』を読み聞かせはじめた。そこで保育者も聞き手として座ると、今度はほかの子どもたちもA児の読み聞かせを聞きに来る。A児の「ふしぎなナイフが…まがる！」「おれる！」「ほどける！」という言葉を聞き、それを聞くみんなが笑顔になる。A児はそんな周りに、話し手としての自分の言葉が伝わったこと喜びを感じているようであった。幼児期はそれまでも周りにあったたくさんの言葉のなかから、自分で理解できる範囲の言葉を中心に参加しようとしている。そのことを保育者は理解し、子どもたちの意欲を受けとめていくことが大切である。(pp.60-61)

絵本や紙芝居、素話などを子どもたちに聞かせた後、それが子どもたちにどのような印象を与えたかを知ることのできた事例である。iii 視聴覚教材を用いた後は、その余韻をそと見守ることを心がけたいものである。子どもたちにまかれた感性の種は、すぐに芽を出すとは限らない。このように保育者がまいた種のその後をすぐに見ることができないことはまれなことである。iii 保育者の実践が子どもへどのような影響を与えたのか気になる気持ちは理解できるが、だからといって保育者が子どもたちにその感想をどういった？」「(登場人物は)何が出てきた？」「みんなも(このお話のように)〇しようね」というような感想やストーリーの質疑応答、教訓めいた言動は、子どもたちが余韻を味わっているフタタジの世界、夢が膨らんだ世界から、無理やり現実を引き戻すことになりかたない。子どもは目や耳にした言葉からさまざまな想像を繰り広げ、おのずと生活に取り込んでいく。絵本や紙芝居、エプロンシアター、パネルシアターなどを通して、子どもたちの心は躍動したり、和んだり、勇気を得たりと、数えきれぬほどの経験を得ている。iii 子どもの可能性を信じて、まいた種を掘り起こさずじっと見守る心の強さを持ち続けられてこそ、保育者の専門家ではないだろうか。(p.102)

で、しっかり者のお母さんの登場もお話の構成もよく、絵がみごとにお話の世界を物語っている。早くは、2歳児クラスから楽しむが、こやぎとおおかみかみのやりとりのおもしろさは、もう少し大きくなった方がより増し、4-5歳児にも充分楽しい絵本と遊びである。iv おおかみが前足を白くして登場する場面では、子どもたちの緊張感は一気に高まり、「だめ、だめだよ。おおかみだよ」「戸を開けたらだめ！」と、力いっぱい大きな声で大合唱する。おおかみが部屋に飛び込んでこやぎを襲うところでは、「早く、早くにげろ」「キヤー！」「子どもたちの声飛び交う。お母さんやぎが戻って来て悲しむ場面では、子どもたちも悲しそう。でもすぐ、「あっちにおおかみいるよ」と教え、おおかみのおなかからこやぎが出てくると手を叩いて喜び、お話と一体化している。こやぎになったつもりで絵本を見て、すぐにごっこ遊びに発展していく。初め保育者がおおかみ役になるが、そのうちおおかみ役になる子どもも出て、追いつかっごや積み木のお家を作り、劇遊びを繰り返すこともできる。(pp.184-185)

表1-2 絵本の読み聞かせに関する記述(下線 i:読み聞かせの目的、下線 ii:読み方、下線 iii:終わり方、下線 iv:子ども同士の関わり、下線 v:保育者からの働きかけ)

<p>新訂 保育内容指導法「言葉」2018 田上貞一郎／高荒正子著 萌文書林</p>	<p>保育内容 ことば 第3版 2018 赤羽根有里子／鈴木穂波編 みらい</p>	<p>保育内容 指導法「言葉」2019 大橋喜美子／川北典子編著 建帛社</p>	<p>保育内容「言葉」指導法 2018 馬見塚明久／小倉直子編著 ミネルヴ ア書房</p>
<p>i ①想像から創造の世界へ導く 未知の世界への想像(イマジネーション)を働かせるためには、視覚的補足のある絵本は好材料となる。動画のような連続的展開ではないので、絵と絵の間隙に想像を巡らしイマジネーションを動かせるプロット(小説の筋)を創造する。②ことばに関心を持ち、ことばで表現する力を豊かにする 繰り返して見る・ストーリー暗唱・予測したり、物語の筋立てを先取りして満足感を得る。この過程でことばに敏感になり、ことばで表現する能力を身につける。③関心事の広がりを感じ、心を養う 主人公になりきって疑似体験を繰り返しながら感動の心が育っていく。感動の積み重ねから、情緒の安定が図られる。④知的好奇心の発揚につなげながら知識や理解を深める 絵本のジャンルは、多種多様にある。 *「物語絵本」絵を見ながら話を追って行く。そして感動の心を育てる。*「生活絵本」生活習慣やしつけを指導する。 *「知識絵本(観察絵本)」乗り物、動植物、天体、社会などあらゆる情報を物語風に展開して、子どもの科学的知識を遊び感覚で高めていく。それぞれの特徴を生かした与え方をするとより効果的となる。⑤文字や生活の中のことばに関心をもつ 絵本を読み聞かせてもらっているうちに物語に関心を持ち、文字に興味を示す。発問「これなあに」を</p>	<p>i 絵本はそれに親しむことで言葉に対する感覚を豊かにし、子どもの心を育む大切な文化財である。絵本を通して保育者と子どもとの心の交流を図れる読み聞かせは、互いの信頼関係を深め、子どもの心を満足させ情緒の安定へと導く。「読み聞かせをたっぷり味わった子どもたちは、大人になっても、幼い頃に「読み聞かせ」によって得られた心の満足感、それを読んでもくれた保護者のぬくもりを忘れないであろう。また「読み聞かせ」を通して養われた、絵本に対する興味や関心は、そのまま児童文学全体に向けられるようになるだろう。そして、いざいざ絵が少なくなると(あるいは絵が全くない作品であっても)、1人で読書をするようになり、登場人物の気持ちが想像できたり、美しい情景が目に見えたり、といったような作品世界を築き、想像力を自由にくるくると、いろいろな立場で物事が考えられる、心の豊かな人間に成長していくことにつながる子どもに身につけさせたい。(p.150)</p> <p>2 登場人物の気持ちを想像しながら音読する 次に、ii 読み取ったことをもとにして、登場人物の心の動きなどに注意して音読する。会話の部分などをどのように読</p>	<p>i 保育教材としての絵本絵本は、「絵」と「文章」によって「もう一つの世界」が創られる総合芸術である。乳幼児期の子どもにとって、絵本は、玩具と同様に最も身近な文化財であるといえる。「本」という位置付けから考えると、その活用方法としては多分に個人的なものであるが、普及率や手軽さから集団保育の中で用いられることも多い。いざいざにしても、子どもと大人が絵本を仲立ちとして、楽しい時間と空間を共有することが、絵本の大きな役割だろう。(略)絵本については、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の中で、主として言葉の指導面への効用が中心とされてきた。しかし、幼児にとって絵本は、単なる言語指導の教材ではない。集団保育において、乳幼児と保育者が絵本の世界を共有するとき、絵本を“心の栄養”ととらえ、想像力や表現力を育む源として保育内容の中につかりと位置付けていきたい。(p.37)</p> <p>読む際には、表紙を見せながら題名をはっきり告げるところから始める。ページをめくるタイミングや読むスピード、絵を見せる時間などは、どのページも均一である必要はない。ii 物語の内容や、子どもの様子に配慮しながら読む</p>	<p>i 言葉の発達に置いては、表現力やコミュニケーション力とともに名称の認識力や語彙力も育ち、言葉や文字を覚える際にも大きな力となります。子どもが自分で絵本を音読することができれば、読む力、語彙力などが身につきます。(p.118)</p> <p>絵本は、本来、一人で楽しむためのものですが、大型絵本をのぞいて大勢の前で読み聞かせすることは困難です。後ろではよく見えないこともあり、少数での読み聞かせに適しています。語り手は聞き手と近い存在で、コミュニケーションをとりながら聞き手とともに物語の世界へと入っていきます。ii 紙芝居のように語り手と聞き手を隔てるものがないので、声色の使い分けや声の質に凝りすぎると、聞き手はそちらに気を取られてしまいがちです。声の変化や聞き手の様子をうかがうことは、適度にどめましょう。絵本による教育は、少人数で物語を楽しむこと、少人数間のコミュニケーションによる相互作用を特徴としており、少人数に対する読み聞かせだからこそ得るものもあります。(p.107)</p> <p>絵本の質を見極める目とは、物語との関係から絵の妥当性をみる目、昔話の改変を見抜く目の2つであり、いずれ</p>

促し、文字のたどりに読みを始めるきっかけとなる。(p.75)

「言葉」日案 ○月×日(金) 4歳児クラス  
子どもの経験／言語経験／具体的な指導

v どんな店があるか話し合う。／・友だち同士お店について話し合う。・自分の意見を発表したり友だちの意見も聞く／身近なお店などにより“お店”への興味や自分自身で思ったことを恥ずかしがらないで言えるような雰囲気を作るように努める。(pp.62-64)

●留意点  
⑤余韻を楽しむ  
iii読み終えた後に「○○はどうだった？」などの質問攻めは避けるようにする。

⑥絵本の雰囲気をつかみ、心を込めて読む  
ii紙芝居のように音声を交えて演じなくてよい。ゆつくり・明瞭・アクセントやイントネー・ミ・ヨに配慮しながら読み進める。

ii読み聞かせは、保育者の肉声が入るトである。声の出し方・速度・間などに注意する。(略)ii声を出して小説などを表現しながら読む「表現読み」を実行すると良い。(pp.89-91)

v5一読総合法による読み聞かせ  
一読総合法とは、国語教育学者・大久保忠利氏が提唱する集団の場での読み聞かせ方法の一つです。

①題名読み…表紙の絵を見ながら、題を声に出して読んで、予想・想像されることを考えさせ、ことばで表現させる。(期待を持たせる)

むと登場人物の気持ちにあった表現になるか、工夫してみよう。ただし、過剰に感情移入した読み方をすると、子どもは絵本より読み手の方に注目してしまうので、あくまで自然な表現を心がけよう。

3 子供の反応を予想しながら音読し、ページをめくる

(略)ページをめくる瞬間、子どもは絵に集中しているので文は読まない。v文字がないページがあれば、どんなことばかけをしたらよいか(あるいは何もしゃべらない方がいいのか)などを検討して、納得のいくまで繰り返し読んでみるのである。(p.151)

iii読み終わってから、子どもたちからいろいろな感想が出た場合は、時間が許す限りすべて聞いてあげよう。子どもが絵を見て感じたり、保育者のお話を聞いて感じたりしたことをことばで表現することは、「幼稚園教育要領」の「言葉」の領域に示されている「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」という内容とも重なる。(略)

ただし、iii子どもたちがしつかり聞いていたかどうかを試すような質問や、教訓めいた解釈は、保育者の方から極力発しないようにしたい。子どもたちがせっかく楽しんでいった絵本の世界を壊したり、せっかく絵本の方に向いていた興味や関心がそがれるおそれがあるからである。(p.153)

ここで取り上げた日案は、小学1年生国語科の単元「おおきなかぶ」での1年生と年長児との「読み聞かせ交流会」の開催後に、あらためて小学校の学校司書が園に出向き、絵本の「読み聞かせ」を行った幼小連携の取り組みの一例である。

ことが大切である。iii最後には裏表紙もきちんと見せ、物語の世界の余韻を楽しむために、保育者のほうから必要以上に感想を聞いたたり内容の理解度を問うことは控える。

また、ii絵本の内容や子どもの発達段階に合わせて、読み方には種々の工夫が必要であるが、大げさに声色や表情を変えたり、身振り手振りをつけること、子どもの注意が物語の世界から保育者に移ってしまう。声の大きさや高さを少だけ変えてみたり、間の取り方に気を付ける程度にして、想像力を駆使して絵本の世界を楽しむ子どもたちの想いを大切にしよう。

4)絵本の世界を楽しむために  
絵本は、子どもと保育者が、物語の世界を楽しむ、経験を共有できる保育教材である。同時に、v保育者の想いを、絵本を通して子どもたちに伝えることも可能である。(略)絵本は、人がその人生で初めて出会う本である。そして、生涯にわたって楽しむことができる本でもある。幼い頃に出会った絵本のたえ一場面であっても、大人になってなお覚えていいる人は多い。iそれは、ただ物語の世界を思い出すことだけでなく、読んでもらった人の声の調子やその場の穏やかな空気の流れなども包括して鮮やかによみがえれる幼少期の体験であり、それらも含めて、“絵本を読む”ということなのだといえる。(p.38)

コラム 外国の絵本から楽しさを実感する保育実践  
\*最後のページ(結論)を想像する絵本の読み聞かせ  
作品名『ぼく、いってくる!』マチュー・マデラ、ふしみみさを訳、光村教育図書、2013。

も保育者として大切な力です。すでに存在する話を改変した作品もあるので、保育者が、改変された「お話の引き出し」をけのしつかりとした「お話の引き出し」をもちましよう。前述したとおり、i・v絵本による教育は、少人数で物語を楽しむことと、少人数間のコミュニケーションによる相互作用があることを特徴としています。これにより協調性や集団性・社会性が育ちます。また、4、5歳以降であれば、読み聞かせの実演後に直に質問したりそれに答えたり感想を述べたりすることで、思考力・感受性・想像力が育成できます。また、絵本の質をみる目を、子どもにも育てることができ、これは言葉の力を養成することにつながります。たとえば、批判的認識力が養えますが、これは感想などを述べるべき力となります。(pp.108-109)

4歳児 部分実習指導案  
予想される子どもの活動／保育者(実習生)の援助・配慮点

○絵本『さんまのおふだ』を楽しむ。  
怖い場面で声を上げる子どももいる。  
終了後、「やまんば、食べられちゃったね」「助かってよかったね」など、感想を語る子どももいる。○読み聞かせの約束を確認する。絵本がよく見えるか、全員に確認する。i鑑賞中は静かにし、聞きたいことがあったら終わってからなどと伝える。・読んでいる最中におしやべりをする子どももいたら、そっと目配せするなどして気づかせ、子どもたちから感想が出てきたら、共感的な態度で受け入れる。(pp.123-124)

②表象化と具体化…イメージを浮かばせ自分のことばで言わせる。  
 ③予想意見出し…今後の話の展開を予想させて話し合い、新たな感動を起こさせる。  
 ④感想意見出し…保育者と子ども・子どもと子どものかかわりをもつ。  
 ⑤立ち止まり…事前に立ち止まり個所を決め発問を与える。話の流れを壊さない程度にする。  
 ⑥話し合い…読み終えたら、みんなで感想を話し合う。自分の感じ方や他の人との違いに気付くことができる。「おもしろかった」だけでもよい。

6 絵本を通して  
 ①子どもと共通の話題をもち、話が展開していく。  
 ②子どもの心を大切に受容する。  
 ③v自分の読み聞かせを通して、発問の仕方の難しさに気付く。  
 ④どの場面でも何を知らせたいのか、絵本を分析して十分把握しておくことの重要性を知る。(略)  
 ※保育園では昼寝の前、幼稚園では降園前に集まった時を利用して読んであげると、絵本に触れる機会が多くなる。子どもが「これ読んで」と要求してきたら「聞きたい人集まれ」で、読んであげると、絵本を子どもに読み与えることは、丁寧な読みもよいが、多ければ多いほどよいという考え方もある。v毎日、最低でも1冊は必ず読み、1カ月に1回は「一読総合法」を入れていきたい (pp.91-92)

表 11-1 絵本を用いた日案例 『おきなかぶ』の絵本を用いた日案例—5歳児(略)  
 保育教諭の援助・指導 (担任★司書☆)  
 保育教諭の援助・指導  
 ◇子どもが選んだ絵本を読む☆  
 ◇読み聞かせが終わった後、子どもから感想を聞く。★☆  
 ・v「伝えたい」「お話ししたい」ということが思い浮かんだら挙手で知らせるよう伝える★  
 ・v友だちのお話の内容がよくわかったり、面白いなあと思ったことに気づくために、友だちがどんなお話をするかよく聞くように声をかける。★  
 留意点・配慮点  
 ・iii 子どもからの感想は、無理に聞き出すのではなく、子どもから伝えたい思いがあふれて言葉として自然と発せられるよう、読み終わった後の余韻を楽しみながら待つ。  
 ・v 小学校への学びが滑らかにつながるように、どうしたらみんなが楽しくお話ししたり、聞いたりできるか気づかせながら、話し方や聞き方のルールが自然に身につくような言葉がけをする。  
 ・iv 司書は、子どもから発せられた感想とかかわる場面の絵を開き、発表する子どもが話しやすいように、他の子どもについては発表者と一緒にその思いが共有しやすいように配慮し、必要な言葉がけをする。(pp.154-155)

ストーリー ことりのぼうやが「よーしきめた！いいってくる！」と言って旅に出かける話である。(略)  
 この絵本の展開がおもしろいところは、ラストページまでどこに行ったか書かれていない。これをみんなで想像してみるといった展開である。v 絵本の最後がどのようになっただのかが書かれていないのである。これを子どもたちに問いかけることにより、子どもの想像性をいかにすることができる。  
 \* 絵本のストーリーを見て題名を考えよう  
 作品名『すきすききゅー！』イアン・ホワイブrawn文、ロージー・リーヴ絵、おひかゆうこ訳、徳間書店、2004。  
 (略) v「ちゅーちゃん、いいたい何をわすれたの？」「それを見よう」と考えてみよう「題名も考えてみよう」といった問いかけをしたら、子どもはどのような反応をするだろうか？  
 v 絵本の読み聞かせは通常、最後のページまで読み終わるのが一般的であるが、時々、子どもたちと楽しむおもしろい実践があってもよいと思われる。一人ひとりの子どもが自分なりの思いをもつて理解して、その世界を楽しめるものなら、それは、子どもを想像の世界へといざなうことになるのではないだろうか。(pp.114-115) (注：下線は筆者が削除)

### 3 考察

#### (1) 絵本の読み聞かせの目的について

調査Ⅰから、保育内容「言葉」の全てのテキストにおいて、「想像(力)」、「言葉・語彙」を養うことが挙げられていた。また、「情緒、感受性、感動」、「表現力」「思考力」を養うことも、半数以上のテキストで提示されていた。

このことにより、保育者を目指す学生にとっては、教育要領等の領域「言葉」で掲げられている「絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」というねらいを意識した「絵本の読み聞かせ」の在り方の学修を積むことになると考える。

どのような学習成果があるのか、調査Ⅱの質問項目の回答を表15のとおり分析した。

調査Ⅱのアンケートに協力してもらった学生は、前期で「子どものことば」を履修し、絵本の読み聞かせについても学修している。テキストは、保育内容指導法「言葉」(ミネルヴァ書房)であった。

質問項目7「読み聞かせで大切にしたいこと」に対して、本アンケートは、読み方などの方法を聞く項目が多く、このことに影響され、大切にしたいことの質問に対しても技術面を回答する内容が多かった。しかし、技術面に付して、子どもたちを楽しませたい、絵本の世界に浸らせたいと回答した者も14人あり、養育要領等が目指す「ねらい」を意識した読み聞かせを行おうとする意欲が読み取れた。

#### (2) 絵本の読み聞かせの方法について

集団での読み聞かせにおける「読み方」について、すべてのテキストにおいて適度に感情を込めて読むことと記されていた。園などで活動されているおはなしボランティアの中には、淡々と読む方法を推奨する方も多くと聞く。しかし、毎日子どもと一緒に生活している保育者が読むのであるから、テキストでは、物語の世界がイメージできるよう適度に抑揚をつけて読む方法を推奨していると推測する。学生へのアンケート結果を見ても、表8のとおり多くの者が適度に感情を込めて読むことを意識していることが認められた。

次に、読み聞かせにおける保育者の関わり方について、小寺、瀧川、玉置は、テキスト類における「絵本-保育者-子ども」関係の分析から、絵本と子どもをつなぐ保育者の役割として、絵本を読む状況や対象年齢の違いなどを考慮に入れた記述も必要ではないかと問題提起している。

また、「絵本-子ども-イメージ」関係の分析から、1歳3か

月～2歳未満児への保育者の役割として、絵本の絵や言葉に触発されると、子どもは自然と動作や言葉で表現したり、模倣活動や歌が派生したりするので、うまくこのような表現を引き出せるよう援助が必要であると考察している。

本稿では、保育者対子ども、絵本と保育者との関係に加えて、子ども同士の関係があることに着目し、このことを踏まえた上で、保育者が読み聞かせの目的を達成するための援助のあり方について考察する。

教育要領等の領域「言葉」の「目的」には、絵本に親しみ想像する楽しさを味わうことが挙げられている。このことについては、表4のとおり多くのテキストで、子どもが物語の世界に浸り想像する楽しさを味わうため、余韻や感動を大切にするための配慮が必要であると記載されている。

では、余韻とはどういうものであろうか。木村(2004)は、余韻とは、作者の仮想したある「生きている世界」に入ってしまった読者の心が読み終わってもまだ出られない状態であり、具体的には、主人公の最後の気持ちが残っていることだと言う。

この木村の解説をもとに、読み聞かせの終わり方を考えると、余韻すなわち主人公の気持ちに浸っている子どもにとっては、その気持ちをじっくりと味わう時間がほしいであろう。味わう中で、例えば、感じたことを自然と言葉として発出したり、動作として主人公になりきって振る舞ってみたりする子どもが出てくることも多いと思われる。こうした子どもの反応や豊かな想像を子ども同士で味わえるように遊びに発展させていく援助が保育者の役割ではないだろうか。

例えば、表1-1の『保育内容 言葉』(光生館)では、何度も読み聞かせをしているうちに展開を覚えたA児が、ぬいぐるみを前に座らせて読み聞かせを始めた例が紹介されている。そこで保育者が聞き手として座ると、他の子どもも集まり子ども同士の読み聞かせとなり、A児は自分が読んだことに子どもたちが笑顔で反応してくれるので、自分の言葉が伝わった喜びを感じていた、とある。絵本を通じた子ども同士の遊びに発展したわかりやすい例であると考えられるが、こうした保育者の行動が援助に当たるという解説があると学生にとってよりわかりやすく応用が効くものとなると思量する。

学生アンケートにおいて、質問項目6「読み聞かせで学びたいこと」において、「絵本の世界に引き込めるような導入」など導入と回答したものが6人、子どもの発言への対応や問いかけが3人、締めくくり方が4人と、具体的にどうす

ればよいのかを望む回答があった。

学生向けのテキストでは、絵本に触発され、保育者の援助によって遊びへと発展し、子ども同士の関わりで言葉がどのように豊かになっていくかを、具体例として丁寧に解説することが望まれる。

3 点目として、保育者の働きかけによる子ども同士の話し合いなどについて、考え方や方法などが紹介されたテキストが6冊あった。

子どもの言語教育について、岡本(1982)は、「言語化の単純な即時効果だけを旨とするのではなく、その得失を展望のなかにおさめた、「発達中の言語」の教育を目指すプログラムこそ特に期待される」として、次のような試みが必要だと主張している。その一つに「概念のステレオタイプ化や慣習化を防ぐ新鮮な経験をつねに与えるとともに、自己の新たに獲得した概念やルールをふたたび現実の場に再適用していく機会をたえずもとめていく」ということが述べられている。また、「不特定多数に向けてのことばの使用(話しことばにせよ、書きことばにせよ)の能力ばかりに短絡せず、特定のコミュニケーションの相手を意識した言語使用を、少なくとも小学校中期まではもっと充実しておくことが必要であろう」と述べている。この2つに共通することは、生活の場で、身近にいる者との会話等のコミュニケーションを通して言葉で表現することの重要性を主張していると考えられる。

調査Ⅰのテキストにおいて、6冊のテキストで、読み聞かせにおいて、子どもに問いかけたり話し合いを促したりする意義や具体例が紹介されている。

今後、幼少の連携も視野に入れ、毎回でなくともよいので、「交流型読み聞かせ」に当たる活動を取り入れ、子どもの表現の場を充実させていく必要があると考える。

そのためには、テキストの充実とともに、実習園教員の理解も必要である。今回のアンケート結果を見ても、絵本に感動した子どもの発言に対して、共感して受け止めるという指導助言は行われていたが、そのことを発展させることには至っていないようである。今回、学生にとって初めての教育実習であり、高度なことを求めることは控えられたと推察するが、保育者養成校と実習園での指導が共通認識をもって行われるよう留意する必要があると考える。

## 4 謝辞

学生へのアンケート調査に当たり、ご助言、ご協力くださ

った小笠原真弓先生、渡辺直人先生に感謝申し上げます。また、アンケート調査にご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。

## 5 参考文献

小寺玲音, 瀧川光治, 玉置哲淳. 2005. 保育実践における絵本の持つ意味に関する考察. Educare, 2005. ページ: 31-45. 第 25 巻.

岩崎真理子. 1986. 絵本の集団読み聞かせにおける効果(その1). 日本保育学会大会研究論文集, 1986. ページ: 280-281. 第 39 巻.

足立幸子. 2013. 交流型読み聞かせ. 全国大学国語教育学会国語科教育研究:大会研究発表要旨集, 2013. 第 124 巻.

足立幸子. 2014. 交流型読み聞かせ. 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 2014. ページ: 1-13. 第 7(1) 巻.

足立幸子. 2013. 交流型読み聞かせにおける交流の内容. 全国大学国語教育学会国語科教育研究:大会研究発表要旨集, 2013. ページ: 193-196. 第 125 巻.

吉田新一郎. 2018. 読み聞かせは魔法!, 新評論, 2018.

峰本義明. 2018. 「責任の移行モデル」を踏まえた読み聞かせ指導の試み. 新潟青陵学会誌, 2018. ページ: 46-56. 第 11(1) 巻.

文部科学省. 2018. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館, 2018.

厚生労働省. 2018. 保育所保育指針解説. フレーベル館, 2018.

木村裕一. 2004. きむら式 童話のつくり方. 講談社, 2004. ページ: 53-54.

岡本夏木. 1982. 子どもとことば. 岩波新書, 1982. ページ: 175-179.